

いじめ状況想起におけるいじめ判断についての立場間比較

竹ノ山 圭二郎¹⁾

原 岡 一 馬²⁾

要 約

本研究の目的は、いじめ状況における被害者と周囲の者とのいじめ判断がどのように違うのかを明らかにすることであった。実験1では、被験者は被害者または傍観者条件にランダムに割りふられた。そして、いじめについての判断の違いが検討された。その結果、被害者よりも傍観者条件の被験者の方が、よりその状況はいじめであると判断する傾向があった。

実験2では、被害者-傍観者という観点によるいじめ判断の差に加えて、初めはいじめ判断が後の判断に影響するかどうかを検討された。シナリオは、いじめ場面(エピソード1)と、他の人達からの援助的介入を被害者が拒絶するという場面(エピソード2)を含んでいた。被験者の半数はエピソード1-エピソード2の順に回答し、他の被験者は逆の順序で回答した。その結果、被害者より傍観者は、よりいじめと判断していた。そして、エピソード1における判断は、エピソード2における判断に影響していた。

実験3では、集団の数人の成員から被害者が無視される時、被害者が仲間はずれにされているという被験者の判断の程度が検討された。実験の要因は、被害者-加害者の立場、被害者への原因帰属、および加害者数に関する判断基準であった。予備調査の結果、3種類の判断基準がみいだされた。それは、(1)数人、(2)半分、および(3)ほとんどの仲間から無視されたときに、被害者が仲間はずれにされたという判断するという基準である。その結果、加害者の方が被害者よりも仲間はずれと判断し、また1番目の基準(数人の加害者)を持つ被験者の方が、より被害者は仲間はずれにされていると判断していた。しかし、どの条件でも、疎外の原因が被害者にあると、その被害者が仲間はずれにされているという判断は低下した。

一連の実験を通じて、被害者に対するいじめに関する判断の程度において、被害者条件の方が他の条件よりも低かった。これらの結果は、いじめを否定する被害者の傾向を反映するものと解釈された。なぜなら、いじめの被害者であると認識することが自尊心への脅威となるからである。

キーワード：いじめ、原因帰属、自尊心

問 題

いじめに関するトラブルが発生したとき、いじめがあったかどうかという事実認識において、しばしば関係者間に食い違いがみられる。そのような認識のずれ

はどのように生じるのだろうか？

学校におけるいじめの問題は1980年代以降、数多くの研究が行なわれてきた。一口にいじめといっても、その形態は暴力的なものから仲間はずれに至るまで様々なのであるが、能重(1993)は、いじめに関する全国

1) 久留米大学比較文化研究所研究員
2) 久留米大学大学院心理学研究科教授

的な統計資料を概観し、いじめを脅し・暴力・金品のゆすりなどの「非行型」、ふざげやからかいなどの「遊び型」、陰口や無視といった陰湿な「異質排除型」に分類した上で、全体的な傾向としては、暴力や持ち物にいたずらする形のいじめから、悪口・陰口など言葉によるいじめへの変化がみられると指摘している。

滝 (1992a) は小中学校を対象とした実態調査を行い、いじめを①仲間はずれ・無視・陰口、②嫌がらせ・いたずら、③わざとぶつかる・叩く、④おどかす・暴力・金銭、の4類型に分類した上で、加害経験率、被害経験率、目撃経験率いずれにおいても仲間はずれ・無視・陰口が最も多かったことを報告している。

仲間はずれは暴力行為などとは異なり、目に見える形では行われなため、とかく「見えにくい」とされるいじめの中でも、とりわけ被害が見えにくいものになってしまう。そのため、周囲の傍観者や教師までもが単なる「ふざげ」として認識しやすい。

ところで、60年代以降行われてきた援助行動研究において、これまでに様々な援助行動モデルが提案されてきているが、いずれにしろ、最初の段階に重大事態への気づきがおかれていることは共通している (e.g., Latané & Darley, 1970; Piliavin & Piliavin, 1972; Schwartz, 1973; 高木, 1998)。状況の重大性とは、予期される被害の大きさ、被害者にとっての深刻さ、緊急性や援助の必要性などが複合した概念であり、簡単にいえば、「大変なことが起こっている」という意識である。この状況の重大性に気づいて初めて、その後の援助行動の生起プロセスが開始される。他者の困窮事態に直面したとき、潜在的援助者の意思決定に影響する要因は、出費・報酬や原因帰属など様々なものが考えられているが、ときとして傍観者が援助的介入を行わないことの最大の原因は、直面した状況の重大性を傍観者が軽視しすぎるためではないだろうか (竹ノ山, 1997)。

いじめは明らかに社会的規範に反する状況であり、したがって、傍観者が直面している状況をいじめと判断すれば援助行動の意思決定過程が生起するのではないと思われる。ところが、いじめには様々な形態があり、状況が複雑なため、いじめかどうかの判断には明確な基準がなく、各関係者が主観的に判断せざるをえない。坂西 (1995) は、「何をもっていじめと考えるかは、当人の主観によるところが大きい。つまり、外部の人はからかいだとみる行為であっても、当人が心理的・身体的苦痛を感じ、いじめであると受け止めるなら、それはいじめになる」と述べている。

また滝 (1992b) は、いじめ行為が当事者だけの問題ではなく、傍観者・観衆のいじめに与える影響も研究されるべきだと指摘しているが、大野 (1996) は、いじめの被害者に何ら問題のない場合でも、攻撃が「いじめ」として定義される形で行われるだけで、第三者が「被害者にも問題がある」と判断してしまうことを、実験的に明らかにしている。そこでは被害者と第三者の判断が直接比較検討されてはいないが、この点で両者の判断に違いが生じているのではないかと考えられる。また、Weiner (1980; 1995) は、傍観者が困窮状況の原因を困窮者に帰属すると、困窮者に対し嫌悪感が生じ、援助が行なわれなくなることを明らかにしている。したがって、傍観者が「被害者にも問題がある」と判断すると援助的介入が抑制されると考えられる。

ところで、いじめは比較的長期にわたる被害者への攻撃である。すなわち、一般にいじめは攻撃が反復して行われる点に特徴がある。そこで、判断者はいじめ状況に直面する度に判断を更新することが求められる。Lord, Ross, & Lepper (1979) は、多様な情報を与えられたとき、人は自分の初期態度に一致する情報はそのまま受け入れ、初期態度に反する情報には批判的な評価を与えることによって、当初の初期態度を維持することを実験的に明らかにしている。いじめの初期段階で判断者が、いじめである、あるいはいじめではないという判断を形成すると、そのことが後の判断に影響すると考えられる。

また、いじめは多対一という特徴も持つ。つまり、ひとりの被害者に対する多くの加害者からの攻撃である。Latané (1981) は、個人におよぼされる集団からの影響を社会的インパクト理論 (social impact theory) により説明している。すなわち、他者からの心理的影響量は、影響の源泉である集団のサイズが大きくなるにつれて指数関数的に増大する。いじめに伴って、被害者に加害者集団から心理的圧力が加えられると想定すれば、被害者が被る心理的影響量に関して社会的インパクト理論を適用しうられると思われる。すなわち加害者の人数が増加するにつれて、被害者が被る心理的圧力も増大すると考えられる。一般に、学級の一部の成員が加害者となりいじめが行われるが、このとき、被害者と加害者の判断の違いは生じるだろうか。また、加害者の人数がどのくらい多ければいじめと判断されやすくなるだろうか。

以上の観点から、本研究ではとりわけ被害者と周囲の者との立場の違いによるいじめ判断の相違に焦点を

当てて、場面想定法による一連の実験を行なった。場面想定法は、条件操作の際に意図しない要因の混入を極力抑えることができ、また実施も比較的容易であることが利点であるが、条件操作のインパクトが弱いという欠点がある。そこでまず実験1では、場面想定法を用いて、傍観者-被害者の立場の相違によるいじめ判断の違いが生じるかどうかを検討する。使用されたシナリオは2人の登場人物(A, 私)の会話によって構成されており、会話文そのものは同一だが、条件によって発話者が交換されていて、傍観者条件ではいじめられていると“A”が“私”に訴えており、被害者条件では“私”が“A”に訴えているという内容である。

次に実験2では、引き続き傍観者-被害者の立場によるいじめ判断の差違の検討に加えて、いじめであるという初期判断あるいはいじめではないという初期判断が後の判断に影響するかどうかを検討する。そのためシナリオには、いじめられる場面が描写されているエピソード1と友達からの援助的な働きかけを被害者が拒絶するという内容のエピソード2が含まれている。約半数の被験者にはエピソード1の後にエピソード2が提示され、残りの被験者には逆の順序でシナリオが提示される。そこで、初めのエピソードに対する判断が次のエピソードに対する判断に影響するかどうかを検討する。

そして実験3では、一部の友人からいじめられるときのいじめ判断を検討する。しかし、暴力などの積極的攻撃を含むいじめ状況では、加害者ひとりひとりの影響力が異なるため、人数以外の要因が大きく影響してしまう。そこで、そのような積極的攻撃を含まない仲間はずれ状況を場面としてとりあげる。いじめの中でも仲間はずれという形態は、基本的には無視という消極的な攻撃によるものであり、加害者数の増加に伴って仲間はずれと判断される可能性が高まると考えられるからである。そこでまず、学級の中でどのくらいの成員から無視されると仲間はずれと判断するのか、すなわち、加害者の人数に関する仲間はずれの判断基準について調査する。

ところで無視行動は消極的な攻撃であるため、加害者と傍観者の区別が明確ではない。そこで、実験3では、被害者と加害者の立場をとりあげ、仲間はずれ判断の違いが生じるかどうかを検討する。また、被害者への内的原因帰属が仲間はずれ判断に影響するかどうか合わせて検討する。そのためシナリオには6人の友人グループの中で理由もなく3人の成員から被害者

が無視される場面1と被害者に仲間はずれの原因があることが記述される場面2が含まれている。それぞれの場面に対する被験者の反応を比較する。被害者に原因が帰属されると仲間はずれ判断は低下すると考えられる。

実験 1

いじめ事件が生じたとき、被害者以外の周囲の関係者がいじめとは認識していなかったことが、問題解決への対応を遅らせてしまう。つまり、被害者のいじめ判断と周囲の傍観者によるいじめ判断とがずれてしまうのではないかと思われる。そこで本実験では、場面想定法を用いて以下の仮説を検討する。

仮説：被害者と傍観者が登場するシナリオを、被害者の立場で読んだ被験者の方が、傍観者の立場で読んだ被験者に比べ、よりいじめであると判断するだろう。

また、いじめ判断以外にも、状況の原因帰属など援助行動研究でよく扱われている要因が、立場要因と関連するかどうかを探索的に検討する。

方法

実験計画 立場要因(傍観者-被害者)による被験者間一要因計画。

被験者 高校衛生看護科1年生39名(全員女性)。うち傍観者条件19名、被害者条件20名。被験者はそれぞれ無作為にどちらかの条件に割り当てられた。

刺激文 ふたりの登場人物(A, 私)が会話しているシナリオで、一方が仲間はずれにされていると訴え、それに対して他方は反論しているという状況設定。会話内容については完全に同一であるが、話し手を交換し、傍観者条件ではいじめられているとAが私に訴えており、被害者条件では、いじめられていると私がAに訴えている。以下に傍観者条件のシナリオを示す。

この物語には二人の人物(私, A)が登場します。どちらも、この文章を読んでいるあなたと同性の(あなたが男性なら男性の、あなたが女性なら女性の)人をイメージしてください。

Aは、最近クラスのみんなどうまくいかず、ギクシャクした関係になっている。そのAが、放課後、私に話したいことがあるとやってきたので、空いている教室に二人で入った。以下はその時のやりとりである。

私はクラスの同級生のAと二人で話している。Aは感情が高ぶって激しい口調で、私に言う。

A:「今朝、あなたたちに私が話しかけたとき、どうして聞こえないふりしたの？」

私:「別にみんな、無視したわけじゃないよ。それに、

どうして私にそんなことを言うのかな。私は何もしていないよ」

私はちょっと不機嫌な口調でこたえる。

A:「この前も、クラスみんなでおしゃべりしていたとき、私が話しかけても誰もこたえてくれなかった」

私:「そうかなあ。そんなことなかったよ。それに、話しかけたときに、たまたま誰も答えないぐらいのことは、誰にでも経験があることでしょう?」

A:「たまたまじゃなくて、今までずっと、そうだったよ」

私:「そんなことないよ。それにもし、たまたまとか、ときどきあったとしても、ずっとっていいことはないよ。」

A:「……だいたい、みんなどうして私を嫌うのかな?」

私:「何かみんなの気にさわるようなことしたかな?」

私:「別に、私たちはあなたのことを、嫌いなわけじゃない。私だって別に嫌ってるわけじゃないよ。ただ、あなたは前から人づきあいが悪い方だし、みんなとあまり遊んだりしないでしょう」

A:「私だって、ずいぶんみんなと仲良くしようと努力したんだよ。でも、あまり認めてはもらえなかった。それに、仲良くなれなかったのは私だけのせい?」

私:「ほんとにそうかな。あなたはちょっと自分勝手に、みんなに合わせるってことをあまりしなかったでしょう。ところで、誰かにいじめられたりしたの?」

A:「そんなことないけど……」

私:「じゃあ、どうして、そんなこと私にいうのかな。私はあなたに何もしていないよ。だから、私には関係ないでしょう?」

A:「それはそうなんだけど……」

私:「じゃあ、もう帰るね。さよなら」

A:「……」

質問項目 質問項目は以下の14項目。具体的な質問項目として括弧の中に傍観者条件で使用されたものを示す。1 被害者への原因帰属 (クラスの人たちとうまくいかないのはAに原因があると思いますか)。2 傍観者への原因帰属 (「私」にこの原因があると思いますか)。3 クラスへの原因帰属 (クラスの他の人たちにこの原因があると思いますか)。4 いじめ判断 (Aはいじめられていると思いますか)。5 仲間はずれ判断 (Aは仲間はずれにされていると思いますか)。6 傍観者の加害評価 (「私」がAをいじめていると思いますか)。7 被害者への悪影響 (この状況をほうっておくとAの心身に重大な悪影響があると思いますか)。8 援助の必要性 (Aに誰かの助けが必要だと思いますか)。9 被害者の解決可能性 (この問題はAが一人で解決できると思いますか)。10 傍観者の援助規範 (「私」はAを助けるべきだと思いますか)。11 クラス成員の

援助規範 (クラスの他の人はAを助けるべきだと思いますか)。12 被害者のつらさ (Aはつらい気持ちを感じていると思いますか)。13 被害者の苦しみ (Aは苦しんでいると思いますか)。14 被験者の援助への意思 (もし、あなたなら、Aを助けるために何かしてあげますか)。各項目は、全くそう思わない (1点) から非常にそう思う (7点) までの7段階で回答を求めた。

手続き 質問紙を配布し、集団で一斉に行なった。

結果と考察

各質問項目について、傍観者条件と被害者条件を比較するために、分散分析を行ったところ、いじめ判断 (いじめられていると思いますか) にのみ、有意傾向 ($F(1,37)=3.852, p<.1$) がみられた。それ以外の項目では有意差がみられなかった。Table 1に各条件におけるいじめ判断の平均値と標準偏差を示す。

いじめ判断におけるこの結果は、他者の視点での判断に比べ、自分が被害者であるときの方がよりいじめではないと判断する傾向があることを示している。この結果は、被害者よりも傍観者の方がいじめを否認するのではないかという予想とは逆の結果であった。この結果は、被害者にいじめ被害を否認する傾向があることを示唆していると思われる。

次にこの状況の原因帰属といじめ判断との間の関係を調べるために、被害者への原因帰属、傍観者への原因帰属およびクラスへの原因帰属といじめ判断に対する反応について相関分析を行なった。両条件をこみにして相関をみたところ、被害者への原因帰属といじめ判断の相関係数は $-0.34 (p<.05)$ であり、傍観者への原因帰属といじめ判断の間には有意な相関はみられず、クラスへの原因帰属といじめ判断の相関係数は $0.50 (p<.01)$ であった。つまり、被害者に原因があると判断するといじめ判断は減少し、クラスの人達に原因があると判断するといじめ判断は増加する傾向がみられた。そこで、より詳細に検討するために、条件別に相関分析を行なった (Table 2)。

傍観者への原因帰属といじめ判断の間には有意な相関はみられなかったが、興味深いことに、傍観者条件の被験者は、クラスの人達に原因があると思うほどい

Table 1 立場によるいじめ判断の差違

条件	平均値(標準偏差)
傍観者	3.947(1.317)
被害者	3.150(1.151)

Table 2 各条件における原因帰属といじめ判断との関係

	いじめ判断	
	傍観者条件	被害者条件
被害者への原因帰属	<i>ns.</i>	-.47*
傍観者への原因帰属	<i>ns.</i>	<i>ns.</i>
クラスへの原因帰属	.79**	<i>ns.</i>

記号は無相関検定の結果を表す。* $p < .05$, ** $p < .01$

じめであると判断しており、逆に、被害者条件の被験者は被害者に原因があると思うほどいじめではないと判断していた。傍観者条件の被験者は、被害者よりも周囲の者の行動に注意が向けられ、クラスの人たちに原因があるかどうかがいじめ判断の判断枠組みとして用いられるのに対して、被害者条件の場合は、被害者に注意が向けられ、被害者に原因があるかどうかを判断の枠組みとして用いられるのかもしれない。

ところで、いじめ判断以外の項目には立場による有意差がみられず、いじめ判断にしても有意傾向の差がみられたただけであった。この結果は、本実験で用いられたシナリオがあまり適切ではなかったということの意味しているのかもしれない。シナリオでは被験者の立場を操作するために一人称が用いられていたが、一人称で書かれた文章は場面想定において感情移入しにくいかもしれない。また、シナリオではいじめ場面が直接的には描かれておらず、いじめがあったかもしれないと間接的に暗示しているだけであるが、直接的でない状況設定は、被験者にイメージを十分に喚起させるには至らなかったのかもしれない。つまり、シナリオ全体として条件操作のインパクトが充分でなかったために、従属変数に大きな差が生じなかったのかもしれない。またさらに、このシナリオの内容が、被害者の態度や性格にこの状況の原因があると被験者に暗示してしまったのかもしれない。大野(1996)は、いじめ被害者にも問題があると第三者に判断されがちであることを指摘しているが、そのため、いじめであるという判断が充分高まらなかったのかもしれない。

実験 2

実験1では、被害者の方が傍観者よりいじめではないと判断する傾向がみられたが、それはシナリオの内容から被害者の方に原因があると被験者が推定したからだろうか。あるいは、被害者にいじめ被害を否認する傾向があるからだろうか。そこで本実験では、被害

者がわけもなくいじめられるという内容のシナリオに対して、被害者-傍観者という立場によるいじめ判断の違いが実験1と同様に生じるかどうかを検討する。もし、被害者にいじめ被害を否認する傾向があるのであれば、本実験においても、被害者より傍観者の方がいじめであると判断するだろう。

ところで、Lord, Ross, & Lepper (1979) は、強い初期態度を持った人は、確証的な証拠と反証的な証拠が混ざった情報を与えられた場合、確証的な証拠をそのまま受け入れ、反証的な証拠には批判的な評価を与えることによって、態度が中庸化されるどころか、逆に態度を強めてしまうことを実験的に明らかにしている。いじめ状況においても、いじめである(もしくはいじめではない)という初期態度が形成されてしまうと、後のいじめ判断に影響するかもしれない。そこで、被害者がわけもなくいじめられるという内容のシナリオ(エピソード1)に対する反応と、同級生からの援助的働きかけを被害者が拒絶してしまうという内容のシナリオ(エピソード2)に対する反応を比較し、被験者の反応がどのように変化するかを検討する。そのため、被験者を2群に分け、一方の被験者にはエピソード1-エピソード2の順序(set 1)でシナリオを提示し、他方の被験者には逆に、エピソード2-エピソード1の順序(set 2)でシナリオを提示し、それぞれのシナリオに対する反応の変化を比較検討する。したがって、全ての被験者は、set 1-被害者条件、set 1-傍観者条件、set 2-被害者条件、set 2-傍観者条件の4条件のいずれかに割り当てられる。set 1条件の被験者は、初めに提示されるエピソード1によって、この状況はいじめであるという判断を形成するため、後に提示されるエピソード2に対するいじめ判断をそれほど低下させないのではないかと考えられる。また逆に、set 2の被験者は、初めのエピソード2によって、この状況はいじめではないという判断を形成するため、後のエピソード1に対していじめであると

Table 3 各条件におけるエピソードと測定の順序

被害者条件	set 1(n=11)	全体状況	測定 1	エピソード 1	測定 2	エピソード 2	測定 3
	set 2(n=11)	全体状況	測定 1	エピソード 2	測定 2	エピソード 1	測定 3
傍観者条件	set 1(n=11)	全体状況	測定 1	エピソード 1	測定 2	エピソード 2	測定 3
	set 2(n=6)	全体状況	測定 1	エピソード 2	測定 2	エピソード 1	測定 3

いう判断をくだしにくくなるのではないかと考えられる。

以上のことから、本実験では以下の仮説を検討する。

仮説1：被害者に比べ、傍観者の方がよりいじめと判断する。

仮説2：エピソード1、エピソード2いずれにおいても、set 2条件の被験者に比べ、set 1条件の被験者の方がよりいじめと判断する。

方法

実験計画 エピソードの順序 (set 1-set 2) 要因×立場 (被害者-傍観者) 要因による被験者間二要因計画。

被験者 専門学校生男性16名、女性23名、計39名。被験者は各条件に無作為に割り当てられた。

刺激文 本実験で使用されるシナリオは、条件操作のインパクトをより高めるために、登場人物を二人称で描き、また、被害者がいじめられている場面をより直接的に描くこととした。

刺激文には「あなた」と「高田 (君/さん)」というふたりの登場人物がいるが、被害者条件では「あなた」が被害者として記述され、傍観者条件では「高田 (君/さん)」が被害者として記述された。それ以外の内容は全く同一である。さらに、いじめ判断の変化を調べるために、いじめ場面の全体的状況、エピソード1 (理由もなしに同級生から無視される)、エピソード2 (同級生からの働きかけを被害者が拒絶する) から構成されるシナリオを作成した。そしてそれぞれのシナリオを読んでもらう度に同一の質問項目に回答を求めた。なお与えられるエピソードの順序の違いが反応に影響するかどうかを検討するために、被害者-傍観者それぞれの条件において、半数の被験者はエピソードの順序が入れ換えてある (Table 3)。

以下に被害者条件で使用されたシナリオを示す。

[全体的状況]

夏休みが終わって登校すると、クラスのみんが自分と口

をきかないようにしていることに、突然気づいて、あなたは驚きました。おはよう、と声をかけてもみんなそっぽを向いて答えないので。以前から友達だった高田 (君/さん：あなたと同性の友人) に声をかけても、高田 (君/さん) はこわばった表情で自分と目を合わせませんでした。

あなたはそれから何度も、クラスのみんなに話しかけてみたり、遊びの仲間に入ろうとしたりしましたが、結局、誰からも相手にされませんでした。

ただし、暴力をふるわれたり、直接、悪口をいわれたりはしませんでした。けれども、何となく、あなたはいたたまれない思いで卒業するまで過ごしました。

[エピソード1]

ある日、こういうことがありました。

○月×日。

昼休みに、高田 (君/さん) やクラスのみんが遊んでいるところに、あなたが後からやってきて、遊びの仲間に入れてほしい、といいました。しかし、みんなは遊びに夢中で聞こえなかったようです。

もう一度、あなたは、自分も一緒に遊びたいといってみました。今度も誰も答えてくれません。あきらめて、あなたはどこかへ行ってしまいました。

○月×日。

休み時間に、高田 (君/さん) やクラスのみんが前日のテレビの話題で盛り上がっているときに、あなたがその番組について発言すると、クラスが急に静まり、みんなそっぽを向いています。そして、クラスの一人がにやにやしながら、「シーン」というと、みんながどっと笑いました。それからすぐに話題が変わり、あなた以外のクラスのみんがスポーツ選手の話題で盛り上がりました。

[エピソード2]

ある日、こういうことがありました。

○月×日。

あなたが、昼休みに、廊下を一人で歩いていると、以前からの友達だった高田 (君/さん) が後から走って追いかけてきて、「一緒に何かして遊ぼう」といいました。けれども、あなたは、「悪いけど、図書室で本を読むから」といって、そのまま一人で行ってしまいました。

○月×日。

遠足のときに広い野原で自由時間がありました。そのとき、高田 (君/さん) が、「みんなと一緒にバレーボールをしよう」と誘ってくれましたが、あなたは、「ちょっと疲れたから」といって、木陰に一人で座っていました。

途中で、高田(君/さん)が、「一緒にやらない?」ともう一度誘いにきましたが、あなたは、「見てるのが面白いから」と答えて、自由時間が終わるまで座っていました。

質問項目 質問項目は以下の10項目。括弧内に被害者条件で使用された質問項目を示す。1 いじめ判断(この状況をいじめだと思えますか)。2 仲間はずれ判断(あなたは仲間はずれにされていると思えますか)。3 被害者への悪影響(この状況をほおっておくとあなたの心身に重大な悪影響があると思えますか)。4 非重大性判断(これぐらいのことはたいしたことはないと思えますか)。5 援助の必要性(あなたに誰かの助けが必要だと思えますか)。6 被害者の解決可能性(あなたが一人で解決できると思えますか)。7 援助規範の程度(クラスの人にはあなたを助けるべきだと思えますか)。8 被害者のつらさの程度(あなたはつらい気持ちを感じていますか)。9 被害者の苦しみの程度(あなたは苦しんでいますか)。10 被害者の悲しみの程度(あなたは悲しい気持ちを感じていますか)。全ての項目について、全くそう思わない(1点)から非常にそう思う(7点)までの7段階で回答が求められた。

手続き 質問紙を配布し、集団で一斉に行なった。

結果と考察

Table 4 に全体状況および各エピソードごとにまとめた各条件のいじめ判断を示した。ただし set 1 条件はエピソード1の回答後にエピソード2の回答がなされ、set 2 条件ではエピソード2の回答後にエピソード1の回答がなされたものである。全体状況および各エピソードごとに、エピソードの順序(Set 1-Set 2)要因×立場(被害者-傍観者)要因による二要因分散分析を行なったところ、全体状況についてはいかなる有意差もみられなかったが、エピソード1においては、被害者と傍観者の間にいじめ判断の有意差がみられ($F(1,35)=4.726, p<.05$)、実験1と同様にここでも、被害者よりも傍観者の方がよりいじめと判断していた。これは、意外な結果だと思われるかもしれない。なぜ

なら、常識的には周囲の者よりも被害者の方がより強くいじめと判断するのではないかと思われるからである。しかし考えてみると、いじめられた子供はそのことを親や教師に話さないことが多い。詫摩(1995)はその理由として、いじめられたと話すことは子供の自尊心を傷つけること、また例え話したとしても問題は解決されず、かえって「密告した」などといったいじめが激しくなると子供が思っていることの2点をあげている。しかしそれ以前に、被害者が自らに対してもいじめの事実を否認しているとは考えられないだろうか。いじめは、被害者にとってそれを認めるにはあまりにもネガティブな状態であり、自尊心への脅威となる。それで被害者の方がかえっていじめとは認めたくないのかもしれない。とりわけ状況のあいまいないじめの初期の段階ではいじめの否認が被害者に起こりやすいということは充分考えられる。

次に、エピソード2においては、set 要因による主効果がみられた($F(1,35)=9.225, p<.01$)。つまり、全体状況に続いて、被害者が同級生からの働きかけを拒絶するエピソード2をいきなり読ませられた set 2 条件の被験者たちは、いじめという判断をほぼ最低点まで低下させたのに対し、エピソード1によって、いじめであるという判断をいったん行なっていた set 1 の被験者たちはエピソード2を読んでやはりいじめ判断を低下させたのだが、set 2 の被験者ほどには低下させなかったのである。すなわち前のいじめであるという判断が後の判断に影響していたのである。しかし set 1 の被験者たちにしたところで、エピソード2を与えられると、エピソード1での判断に比べて大きくいじめ判断が低下することは Table 4 から明らかである。竹村・高木(1988)は、被害者が態度レベルのみならず、行動レベルにおいても周囲から孤立していることを指摘し、その原因として、被害者がいじめられる以前から行動的特徴において逸脱していることも考えられるが、それに加えて、被害者がいじめを受けたことによる心理的影響も考えられると述べている。

Table 4 エピソード順序および立場によるいじめ判断の差

	条件	全体状況	エピソード1	エピソード2
Set 1	被害者	6.000(1.789)	5.818(1.888)	1.909(1.221)
	傍観者	6.545(0.688)	6.727(0.647)	2.636(1.690)
Set 2	被害者	6.000(1.342)	5.455(0.302)	1.091(1.128)
	傍観者	6.667(0.516)	6.333(0.408)	1.167(0.516)

()内の数値は標準偏差

したがって、エピソード2に記述されたような、被害者の側が同級生を拒絶するような態度をみせることは現実にも起こりうることである。そのような態度をみて、周囲の者が急激にいじめ判断を低下させることが、被害者と周囲の者との間がいじめ判断のずれの原因のひとつとなるかもしれない。

仲間はずれ判断については、いじめ状況が記述されたエピソード1において、立場要因の有意傾向 ($F(1,35)=3.901, p<.1$) がみられた。これはいじめ判断と同様のパターンであり、被害者 ($M=5.864, SD=1.490$) より傍観者 ($M=6.706, SD=0.588$) の方が仲間はずれであると判断する傾向があった。エピソード2においては交互作用が有意であり ($F(1,35)=5.529, p<.05$)、Set 1の被験者についてのみ立場要因の単純主効果が有意であった ($F(1,35)=13.274, p<.01$: 被害者 $M=2.000, SD=1.414$; 傍観者 $M=3.909, SD=1.514$)。どちらのエピソードでも、やはり傍観者の方が被害者よりも仲間はずれであると判断していた。ただし、エピソード1より先にエピソード2を読んだSet 2の被験者は傍観者条件でも仲間はずれとは判断しなかったために、判断のずれは生じていなかった。

次に、エピソード1について他の項目への反応を分析したところ、非重大性において、立場要因による主効果がみられ ($F(1,35)=4.631, p<.05$)、被害者 ($M=2.682, SD=1.961$) の方が傍観者 ($M=1.588, SD=0.795$) よりも大したことはないと判断していた。また援助の必要性においても、立場要因の有意傾向がみられ ($F(1,35)=3.182, p<.1$)、被害者 ($M=5.773, SD=1.193$) よりも傍観者 ($M=6.412, SD=0.939$) の方が被害者に誰かの助けが必要だと判断する傾向があった。その他の項目については、有意差はみられなかった。

いじめ場面を記述したエピソード1についての結果をまとめると、傍観者の方が被害者よりも、いじめであると判断し、また仲間はずれであると判断する傾向があり、そして誰かの助けが必要であるとする傾向がみられ、逆に被害者は傍観者に比べ、大したことはないと判断していた。これらの結果は、被害者のいじめを否認する傾向を反映したものである。

実験 3

これまで、シナリオの内容としてクラス内でのいじめという状況を取りあげてきたが、通常、いじめはクラス内でも一部の成員からなされることが多い。いじめにおいて被害者に加えられる攻撃による心理的影響

は、加害者から被害者への心理的圧力として解釈できる。Latané (1981) は、集団から加えられる心理的圧力、すなわち社会的影響に関して、社会的インパクト理論を提唱している。それによると集団からの影響量は集団のサイズが大きくなるほど増えるが、個々の成員が与える影響量は逆に減少していく。言いかえると、集団からの影響量は負の加速度的に増大するという。それでは、加害者集団のサイズがどれほど大きくなれば、いじめと判断されるようになるのであろうか。いじめは多数の加害者からひとりの被害者への攻撃という特徴を持つが (e.g., 大野, 1996)、少数の加害者からの攻撃はいじめと判断されないだろうか。この加害者の人数といじめ判断との関係を検討するために、本実験ではシナリオのシチュエーションとして仲間はずれ状況を取り上げる。なぜなら、暴力行為など積極的な攻撃を含むいじめ状況では、その攻撃の特性によって加害者個々の影響量が異なると考えられ、集団サイズによる影響を純粹に検討することが困難だからである。

異質排除型 (能重, 1993) である仲間はずれは、多対一という特徴を持つ典型的ないじめである。加害者たちからの無視という攻撃は、消極的攻撃ではあるが、被害者に加えられる心理的圧力である。竹ノ山 (1997) は潜在的援助者が援助への意思決定を行なう場合に、事態の重大性を認識することが重要であることを指摘しているが、仲間はずれ事態においても、被害者に加えられるネガティブな影響量を周囲の者がどのように推定判断するのが重要となる。クラスの全成員から無視されていれば、容易に仲間はずれであると判断できる。無視する者がひとりもいなければ仲間はずれではない。しかし、現実にはクラスの一部の成員から無視されるという状況が一般的である。それでは被害者がクラスの中で何人から無視されると、重大な事態つまり仲間はずれであると判断されるのだろうか。言いかえると、加害者の人数に関して、仲間はずれと判断される閾値は、いったい何人くらいなのであろうか。この点を調べるためにまず予備調査を行なった。

予備調査

クラスの中で、何人から無視されると仲間はずれと感じるかという点に関して調査を行なった。被験者は、専門学校生80名 (男性25名, 女性55名) であった。ところで、クラスの一部の成員から無視されるということは、逆に言えば、それ以外の成員からは無視されていないということである。したがって、クラスの中で何

人が無視しなければ仲間はずれではないと感じるか、という点も考慮しなければならない。そこで被験者を無作為に2群に分け、被験者のうち41名には、架空のAさんが40名の同級生に話しかけたとき、何人以上から無視されると仲間はずれという感じがしてくるかを訊ねた(無視群)。残りの被験者39名には、架空のAさんが40名の同級生に話しかけたとき、何人以上が返事してくれれば仲間はずれではないという感じがしてくるかを訊ねた(会話群)。

両群とも回答のヒストグラムはほぼ同じパターンを示しており、また、会話群の回答を逆転し、Wilcoxonの順位和検定(両側検定)をしたところ、両群間に有意差はみられなかった($z=0.753$, *ns.*)ので、両群をひとまとめにしてFigure 1に結果を示す。

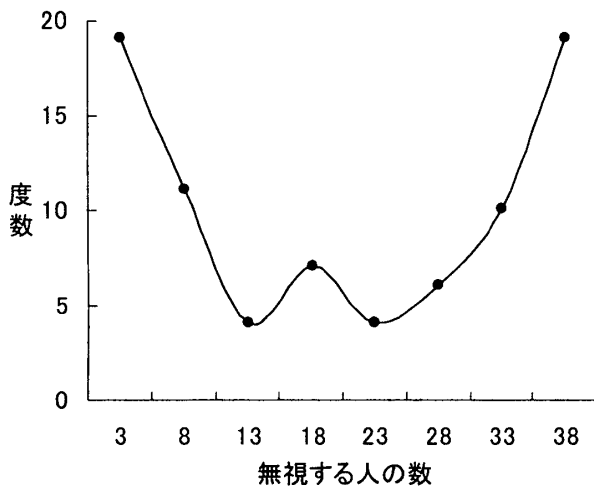


Figure 1 仲間はずれの判断基準

仲間はずれと感じはじめるときの加害者の人数を本研究では、加害者の人数に関する仲間はずれの判断基準と呼んでおく。この仲間はずれの判断基準は、Figure 1に明らかなように、正規分布していない。被験者のうち、約4割の者はごく少数からの無視であっても、仲間はずれであると判断している。また別の約4割の被験者はクラスの大多数から無視されたときが仲間はずれであると判断している。残りの約2割の被験者は、クラスのほぼ半数から無視されると仲間はずれであるとしている。このように、加害者の人数に関する仲間はずれの判断基準には明らかに個人差があり、これは、各個人が持っている仲間はずれとはいかなる状態かということについての概念の違いから生じているのではないと思われる。この仲間はずれの判断基準の個人差からだけでも、同じ状況を見て、仲間はず

れかどうかという判断にはずれが生じるだろう。

実験

実験1および実験2では、被害者と傍観者の立場による判断の違いを検討してきたが、本実験では、被験者が判断するときの立場として被害者と加害者の立場をとりあげる。なぜなら、無視するという行動は、被害者に対する消極的な攻撃であり、加害者と傍観者の区別が困難だからである。行動レベルでは、傍観すること自体、無視することとほとんど同じであるといえる。そこで、一部の同級生から被害者が無視されるという状況を描いたシナリオを、被害者または加害者それぞれの立場で被験者が読んで、仲間はずれであるという判断に違いが生じるかどうかを検討することが本実験の第1の目的である。もし、被害者に被害を否認する傾向があるのであれば、本実験においても、被害者より加害者の方が仲間はずれと判断すると考えられる。

また、予備調査により、加害者の人数に関する仲間はずれの判断基準には、個人差が存在することが明らかとなった。そこで本実験の第2の目的として、判断者が内的に持っているこの判断基準が、特定の場面を描いたシナリオを読んで仲間はずれかどうか判断しようとするときに、実際に影響するかどうかについて検討する。この仲間はずれの判断において、少数基準を持つ者ほど仲間はずれの加害行為に関して敏感であると考えられ、したがって、より仲間はずれと判断すると考えられる。

また、実験1において、状況の原因帰属といじめ判断の関係が示唆され、実験2では、被害者の側に非があるような記述がなされると、いじめ判断が低下することがみいだされた。そこで本実験の第3の目的として、被害者に原因があることを示す情報が付け加えられると仲間はずれ判断が低下するかどうかという点について検討する。

以上のことから、本実験では以下の仮説を検討する。

仮説1: 被害者に比べ、加害者の方がより仲間はずれと判断する。

仮説2: 仲間はずれの判断基準に関して、少数基準を持つ者ほどより仲間はずれと判断する。

仮説3: 被害者が理由もなく無視された場合に比べ、被害者にその原因がある場合は仲間はずれと判断されない。

方法

被験者 被験者は専門学校生70名(男性10名、女性60名)。

実験計画 立場（加害者－被害者）×仲間はずれの判断基準（少数－半数－多数）×仲間はずれの原因（あり－なし）の混合三要因計画。立場要因への割り当ては無作為に行なった（加害群36名，被害群34名）。仲間はずれの判断基準要因は人格的変数である。仲間はずれの原因要因は，回答の変化を調べるために被験者内要因である。

刺激文 “Aさん”と“あなた”が登場する場面1と場面2のシナリオを作成した。場面1では被害者がわけもなく無視される状況が記述され，場面2では被害者に無視される原因があったことが記述されている。被験者はまず場面1を読み，質問項目に回答し，次に場面2を読み同じ内容の質問項目にもう一度回答する。また，加害者条件と被害者条件では，“Aさん”と“あなた”が入れ替わっているだけで，内容については全く同一である。以下に加害者条件で使用されたシナリオを示す。

〔場面1〕

一緒におしゃべりしたり，一緒に遊んだり，いつも行動をともにしている仲のよい6人の友達グループがあります。冗談をよく言うAさんとあなたもその6人グループのひとりです。

ところがあるときから，けんかしたわけでもないのに，Aさんがいくら話しかけても，あなたも含めた3人はAさんを見無視するようになりました。ただ，グループの他の2人はこれまで通りAさんとおしゃべりしてくれます。

〔場面2〕

実はこのようなことになったのは，休みの日にグループで集まるはずだったのに，Aさんが嘘をついてすっぽかしてしまっただけで，その次の日から，学校で会っても，あなたたち3人はAさんに知らん顔をしていたのでした。

質問項目 質問項目は以下の3項目。括弧内に加害者条件に用いられた質問項目を示す。1 仲間はずれ判

断（この状況を仲間はずれと思いますか）。2 事態の深刻さ（この状況がAさんにとって深刻な事態だと思いますか）。3 被害者への悪影響（この状況によってAさんの心身に悪い影響があると思いますか）。それぞれ，全くそうは思わない（1点）から全くそう思う（7点）までの7段階で回答を求めた。

また，仲間はずれの判断基準について，1. 数人からでも無視されれば仲間はずれである／2. クラスの半数ぐらいから無視されれば，仲間はずれである／3. クラスの大多数から無視されれば，仲間はずれである，の中からひとつだけを選ぶよう求めた。

手続き 質問紙を配布し，集団で一斉に行なった。

結果と考察

仲間はずれ判断について，立場（加害者－被害者）×仲間はずれの判断基準（少数－半数－多数）×仲間はずれの原因（なし－あり）による混合三要因分散分析を行なったところ，3つの要因全てに主効果がみられた（立場 $F(1,63)=4.024, p<.05$ ；仲間はずれの判断基準 $F(2,63)=5.945, p<.01$ ；仲間はずれの原因 $F(1,63)=45.337, p<.01$ ）。また各要因のいかなる組み合わせについても有意な交互作用はみられなかった。Table 5に各条件ごとの平均値と標準偏差を示す。

やはり予想された通り，加害者の人数に関する仲間はずれの判断基準は，仲間はずれ判断に大きく影響していた。Tukey法による多重比較（5%水準）の結果，多数基準を持つ者に比べ，少数基準を持つ者の方がより仲間はずれと判断していた。

また実験2と同様に，原因の記述のなかった場面1に対する反応に比べて，被害者に落ち度があるような記述を加えた場面2では，仲間はずれ判断が大きく低下した。

そして立場については，加害者の方が被害者よりも仲間はずれであると判断していた。すなわち，ここで

Table 5 立場，仲間はずれ基準，原因の有無による仲間はずれ判断の差違

立場	仲間はずれ基準	原因なし	原因あり
加害者条件	少数($n=19$)	6.053(1.177)	4.842(1.463)
	半数($n=9$)	5.333(1.581)	4.333(2.121)
	多数($n=7$)	4.571(1.512)	3.286(1.604)
被害者条件	少数($n=15$)	5.533(1.407)	4.000(1.512)
	半数($n=9$)	4.444(1.667)	3.556(1.878)
	多数($n=10$)	4.100(1.792)	2.600(1.174)

()内の数値は標準偏差

もやはり被害者には仲間はずれという判断を否認するような傾向がみられたのである。

次に事態の深刻さにおいては、仲間はずれの判断基準の主効果が有意であった ($F(2,63)=7.812, p<.01$)。Tukey法による多重比較(5%水準)の結果、少数基準を持つ者が半数基準や多数基準を持つ者よりも、深刻な事態であると判断していた。それ以外の有意な効果はみられなかった。

そして被害者への悪影響においては、仲間はずれの判断基準の主効果がみられた ($F(2,63)=6.054, p<.01$)。Tukey法による多重比較(5%水準)をしたところ、少数基準を持つ者が半数基準や多数基準を持つ者よりも、被害者の心身に悪影響があると判断していた。また、仲間はずれの原因の主効果もみられ ($F(1,63)=5.423, p<.05$)、原因の記述のない場面1に比べ、原因の記述のある場面2では、被害者への悪影響についての判断が低下していた。その他の効果は有意ではなかった。

全体考察

被害者としての立場からのいじめ判断や仲間はずれ判断が、傍観者や加害者としての立場からの判断に比べて低いという結果は、実験1、実験2および実験3において繰り返しみられた。このように、異なる被験者、異なる場面設定、異なる刺激文においても、同様のパターンが生じたということは、かなり一般的に安定して現れる現象であるといえる。この現象は、被害者がいじめ被害を否認する傾向を反映したものと思われる。これは当初の予想からすると、意外な結果であった。なぜなら常識的には、被害者のいじめられているという訴えを周囲の者が否定することが、問題の解決を困難なものにしているように思われたからである。本研究で用いられたシナリオはいずれも、ある特定のいじめ場面を描いたものであった。しかし、いじめは被害者への攻撃が長期にわたって継続される状態であるということを考えると、時間的な継続性や攻撃の反復性という情報を欠いたシナリオは、被害者への攻撃という点では明確であっても、いじめかどうかという点に関してはあいまいなものであったかもしれない。けれども現実においても、いじめがはじまった直後はこの時間的な継続性の情報は欠けており、いじめかどうかの判断はそれだけしにくいものと思われる。つまり、いじめの被害者はいじめられていることを親や教師には話さない(詫摩, 1995)が、それは意図して嘘をついているというよりも、とりわけ状況のあいまい

ないじめの初期段階で、被害者は自らに言い聞かせるようにいじめを否認するのではないだろうか。Latané et al. (1970)は、犠牲者、周囲の者を問わず、誰ひとりとして利益を得ることのない緊急事態に直面した人は、その緊急事態の真実性を信じないでおくように、そして、それほど重要ではないと考えるように圧力がかかっていると述べている。いじめの被害者であるという事実は、被害者にとって極めてネガティブな事態であり、自尊心への脅威となるだろう。もしそうであれば、親や教師がいじめかどうかを確認しようと被害者にいくら訊ねても、被害者はいじめを否定するだろう。そして、そのために周囲の者は援助的介入を行なう機会を失ってしまう。その後、状況が悪化し、被害者も自らを誤魔化しきれなくなって、いじめの事実をようやく認めるときには、周囲の者とのいじめ判断にはずれが生じているだろう。このようないじめ判断の時系列的变化については、今後、より詳細に検討する必要がある。

通常、いじめが社会生活における倫理に反する行為であるということは、加害者にも意識されているので、他者からの、そして自己の良心からの非難が予期されるはずである。そのため、そのような罪悪感から自己を守るために加害行為を否定するような認知的なバイアスが加害者に生じるのではないかと考えられる。ところが、実験3における加害者条件では、無視という消極的加害行為に伴う罰、非難、罪悪感といったようなものはあまり意識されず、被験者は比較的冷静な判断を行っていたのではないかと考えられる。つまり、加害者条件の被験者は、消極的攻撃ということもあって、傍観者と同様の判断を行なったのかもしれない。そのため、被害者-傍観者の立場を扱った実験1や実験2と同様のパターンの結果が生じたのではないかと考えられるだろう。

多数の集団成員による被害者への無視という仲間はずれは、いじめの一形態であるが、いったい加害者が何人くらいであれば仲間はずれと判断されるのであろうか。実験3の結果によると、この加害者の人数に関する仲間はずれの判断基準には、少数の者からの無視であっても仲間はずれ、クラスの半数以上から無視されれば仲間はずれ、クラスの大多数から無視されたときが仲間はずれ、という3種類の異なる基準が存在していた。この判断基準の個人差は、特定の状況を判断するときに影響する。すなわち、同一の状況であっても、少数基準を持つ者の方が、多数基準の者よりも、仲間はずれと判断しやすい。

いじめ場面の記述中に、周囲の者からの働きかけを被害者が拒絶したり（実験2）、仲間はずれの原因が被害者にあるような（実験3）記述が加わると、いじめ判断や仲間はずれ判断は大きく低下してしまうことが明らかとなった。Weiner（1980; 1995）は、援助場面において、困窮事態の原因が援助要請者にあり、かつ要請者の統制可能性が傍観者に知覚されると、その困窮についての責任が援助要請者にあると判断され、その結果、援助要請者に対する嫌悪感が生じ、援助されなくなってしまうことを指摘している。しかし、この実験2および実験3の結果は、被験者が状況の原因を被害者に帰属し、被害者に責任があると考えた場合、状況の重大性自体を低く見積もる可能性を示唆している。

一般に、いじめ問題がうまく解決されない理由を、教師の能力や時間の不足などに求めがちであるが、それだけでは不十分ではないだろうか。状況の中に潜む、解決を困難にしている要因を明らかにしていく必要があるのではないだろうか。今後、本研究で扱われたようないじめ判断や仲間はずれ判断が、被害者の援助要請行動や傍観者の援助的介入にどのように結びついているのか、また、それらの過程において原因帰属がどのように影響するのかをより詳細に検討し、明らかにしていく必要があると思われる。

引用文献

- ラタネ・ダーリー 竹村研一・杉崎和子（訳） 1997 冷淡な傍観者—思いやりの心理学— ブレーン出版。（Latané, B. & Darley, J. M. 1970 *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton-Century-Crofts.）
- Latané, B. 1981 The psychology of social impact. *American Psychologist*, **36**, 343-356.
- Lord, G. C., Ross, L., & Lepper, M. R. 1979 Biased assimilation and attitude polarization: The effects of prior theories on subsequently considered evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 2098-2109.
- 能重真作 1993 非行・校内暴力・いじめの現状とその特質 能重真作編 子供の権利を生かす生活指導全書14非行・校内暴力・いじめ 一葉書房
- 大野俊和 1996 被害者への否定的評価に関する実験的研究 実験社会心理学研究, **36**, 230-239.
- Piliavin, J. A. & Piliavin, I. M. 1972 The effect of blood on reactions to a victim. *Journal of Personality and Social Psychology*, **23**, 353-361.
- Schwartz, S. H. 1973 Normative explanations of helping behavior; A critique, proposal, and empirical test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 349-364.
- 高木 修 1998 人を助ける心—援助行動の社会心理学— サイエンス社
- 竹村和久・高木 修 1988 “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性— 教育心理学研究, **36**, 57-62.
- 竹ノ山圭二郎 1997 重大性と原因帰属が援助行動に及ぼす影響—共分散構造モデルの分析 久留米大学大学院比較文化研究論集, **4**, 129-148.
- 滝 充 1992a “いじめ”行為の発生・推移状況に関する実証的研究 教育学研究, **59**, 113-123.
- 滝 充 1992b “いじめ”行為の発生要因に関する実証的研究 教育社会学研究, **50**, 366-388.
- 詫摩武俊 1995 いじめ—のりこえるにはどうするか—サイエンス社.
- 坂西友秀 1995 いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, **11**, 105-115.
- Weiner, B. 1980 A Cognitive (Attribution)-Emotion-Action model of motivated behavior: An analysis of judgments of helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 186-200.
- Weiner, B. 1995 *Judgments of responsibility: A foundation for a theory of social conduct*. New York: The Guilford Press.

The comparison among the bullying judgements on the viewpoints when imagining a bullying situation

KELJIRO TAKENOYAMA (*Institute of Comparative Studies of International Cultures and Societies, Kurume University*)

KAZUMA HARAOKA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

The purpose of this study was to examine about the difference of the judgements of the victim and the bystander or the assailant about the bullying when imagining a bullying situation. In experiment 1, participants were randomly assigned to the conditions of the victim or the bystander. participants on the both conditions read an identical scenario. Then, the difference of the judgements about the bullying was examined. As a result, the participants of the bystander condition tended to judge that the situation was bullying more than the victim did.

In experiment 2, the difference between the judgements about the bullying on the viewpoints(victim-bystander) and the degree which the first judgement about the bullying influenced the after judgement were examined. The scenario contained a bullying scene (episode 1) and the scene that the victim refuses the helping of the other persons(episode 2). The half of the participants answered episode1-episode2 in order. And the other participants answered in opposite order. As a result, the bystander judged bullying more than the victim did. Then, the judgement about episode 1 influenced to the judgement about episode 2.

In experiment 3, when some members of the group ignores the victim, the degree of the judgement of the participants that the victim is ostracized were examined. The variables of the experiment were the viewpoints of the victim-assailant, attribution to the victim and the judgement criterions about the number of the assailants. As a result of the preliminary investigation, three kinds of judgement criterions were found. It was the criterions that the participants judged the victim was ostracized when ignored from (1) several, (2) a half and (3) most of the friends. As a result of the experiment, the participants of the assailant condition judged that the victim was ostracized more than the participants of the victim condition did. And also the participants who have first criterion(several assailants) judged that the victim was ostracized more than the other participants did. However, in any condition, When the victim had the cause of the alienation, the degree of the judgement that the victim was ostracized declined.

Through the series of experiments, on the degree of the judgement about the bullying on the victim, the victim condition is lower than the other conditions. These results showed that the victim has a tendency to denied to be bullied. Because, it threatens the self-esteem of the victim to recognize to be bullied.

Key words: bullying, attribution, self-esteem

いじめ状況想起におけるいじめ判断についての立場間比較